



石村 広 教授

Hiroshi Ishimura

西洋中心の領域に、 新たな視点を提示

中国語への思いから 研究者に「転職」

石村先生のお祖父さんは、終戦後に日本に引き揚げてくるまでの約20年、中国で暮らしていたそうだ。お祖父さんと、幼少期を同じく中国で過ごしたお父さんから、先生は中国のいろいろな話を聞かされて育った。影響を受けて「日本だけではなく、さまざまな国を見てみたい」と考えるようになった先生は語学に関心を抱き、高校では英語の学習に力を入れ、大学では中国文学を専攻。中国語を学ぶにつれて、その新鮮さと面

白さに魅了されたという。

「中国語は、日本語とも英語とも異なる仕組みを持つ言語。英語のようにしっかりとした文法があるわけではないので、一見すると捉えどころがないと感じられるかもしれない。しかし、じっくり見ていくと、中国語のセンテンスには整然とした体系性が息づいていて、そこに「エレガント」とも表現したくなるような魅力を感じます」。大学卒業後、一度は企業に就職したものの「まだ中国語に心行くまで向き合っていない。これ」と感じたものなのだから、やはりじっくり取り組んでみた

い」という思いを強くして退職を決意。中国に留学した後、大学院に入學し、「現代中国語の文法研究」の道を歩み始めた。



タイ・バンコクで開催された言語学の国際学会に出席した石村先生

独特の個性が 興味深い中国語

中国語には、日本語と同様、いやそれ以上に多彩な方言が存在する。そして日本語の「標準語」に相当するものが、中国語の場合は「北京官話」である。先生も、現代中国語としてこの北京官話をベースに研究を行っている。

先生は、現代中国語の特徴をこう語る。「よく言われるのは、中国語は『声調言語』であること。声調とは、音の高低のパターンです。中国語

には四つのイントネーションのパターンがあつて、この違いで言葉の意味が異なります。有名なのが『ma』の発声例で、『お母さん／麻／馬／叱る』を意味する4つの言葉を、声調で話し分けます。先生はまずこの点に興味を感じ、ラジオ講座などを活用してネイティブ・スピーカーの発音を聞き込み、繰り返し真似をしたそうだ。「言語は音声に始まるもの。多くの場合、文字は後から成立したと推測されます。そう考えると、どんな言語でも、まず言葉の正しい音をしっかりと学ぶことが大切だと思います」

次に先生は、中国語の文構造の特徴について触れた。「例えば、『私』を指す単語が文章表現の内容によって『I - my - me』と変化する英語と異なり、中国語は語形が変化することがありません。そこで重要になるのが、主語・動詞・目的語などがどういった順番で並ぶかの『語順』です。中国語は『主語(S)・動詞(V)・目的語(O)』といった順番になる『SVO型』。そういった意味では、英語に似た構造とすることができるともいけません。しかし語形変化がない点で、英語とは厳然とした違いがある。また、『昨天买的衣服(昨日買った服)』のように修飾語が名詞の前に来る点などで日本語に通じる点もろもあるが、先述のように基本文型

の語順は異なる。つまり中国語について知る際には、日本語や英語など他の言語の知識に頼らず、「中国語」そのものを見るのが重要だ、と先生は語った。

中国語ならではの 文構造を追究する

先生の専門分野は言語学に含まれる。「言語学についてよくかいつまんでお話しすると、人類が使っている言語の共通性と個性性を明らかにする学問」と先生は言う。「地球上には実に多くの言語がありますが、人間が使用している以上、伝達効率の良い語順」など、何らかの共通性があるのではないかと考えられます。同時に、一つひとつの言語にはその言語ならではの特性、個性も存在しているはず。そういったことを追究するのが言語学です」

従って先生は、言語の共通性と個性という視点を常に意識しながら、「中国語とはどんな文構造のもとに成り立っている言語なのか」を研究しているという。

現在、先生が重点的に取り組んでいるのが「中国語のヴォイス構文」の研究である。ヴォイス(態)とは受動態や能動態の「態」で、ある動作が行われたことを言葉にする際に、誰

に焦点を合わせて表現するのかを示すものだ。動作を起こすものが主語になる場合、動詞は能動態をとり(例／見る)、動作を受けるものが主語になる場合は受動態をとる(例／見られる)。広義のヴォイスには、使役態や動詞の自己交替なども含まれる。

そもそも中国語の文法書には「ヴォイス」という項目がなかった、と先生は言う。「中国語にもヴォイスが存在すると示されたのは、実は比較的近年のこと。日本語の『れる／られる』、英語の『have』、『cause』などのようにヴォイス構文であることを示すヴォイス・マーカーとして、中国語では『叫／让／使／被／把』の準動詞があることが明らかにされました」

例えば使役文をつくる「叫」が用いられた文は「妈妈叫孩子去买东西(母親は子どもを買い物に行かせた)」となる。しかし先生は、中国語には、こうしたヴォイス・マーカーがなくともヴォイス表現が行われている文が存在することに気づき、「中国語において、ヴォイス表現を成立させる要因は何か」を追究していった。

中国語の視点から 言語学に一石を投じる

「『屈原既放(屈原は既に追放され

Close up

クローズアップ



■ 石村 広 (いしむら ひろし) プロフィール

東京都生まれ。私立サレジオ高等学校卒業。慶応義塾大学文学部中国文学専攻卒業。東京都立大学大学院人文科学研究科中国文学専攻修士課程、東北大学大学院文学研究科言語科学専攻博士課程修了。博士(文学)。成城大学、二松学舎大学を経て現職。

■ 専門分野

・現代中国語文法論

■ 趣味

読書とドライブ。本は専門分野に絡むもののほか、哲学書や日本の古典書をばらばらと眺めることもあります。

温泉が好きなので、ドライブでは箱根や長野に出かけたりします。最近は忙しくあまり遠出ができないのですが、まとまった時間ができたら少し遠くへ足を伸ばしたいです。



先生にとって、ドライブは大切な気分転換の時間

■ 高校生の頃の将来の夢は？

終戦前まで中国で暮らしていた祖父や、旅行会社に勤めていた父の影響で外国の文化や生活習慣に興味を持ち、貿易会社などに入って世界を舞台に仕事をしたいと考えていました。

■ どんな高校生でしたか？

中学から始めたバドミントンを高校でも続けていました。バドミントンが大好きで、中学では県大会で3位に入るほど打ち込んだのですが、がんばりすぎて身体を壊してしまいました。その後は趣味で参加する程度。その分、本を読む時間が増えました。

■ お勧めの本を3冊あげてください。

- ・『記号論への招待』池上嘉彦(岩波新書)…言葉と文化の関係がよくわかる、「目からウロコ」の1冊です。
- ・『木を見る西洋人 森を見る東洋人』R.E. ニスベット(ダイヤモンド社)…「文化の違い」が生じる理由を根本から解説してくれます。
- ・『努力論』幸田露伴(岩波文庫)…日本人が書いた、幸福論の名著だと思います。



■ 特別な1冊

- ・『人生の短さについて』セネカ(岩波文庫) 短い文章が数多く掲載されている哲学書です。中でも、「これ」と自分が信じたものを突き詰めることの大切さを説いた文章が心に残っています。勤めていた会社を辞め、学生に戻って不安定な日々を送っていた時期、自分の決断を信じてがんばろうと前向きな気持ちにしてくれた本です。



■ 高校生へのメッセージ

何ごとであっても、真剣に向き合えば本当の面白さは分かりません。何か一つ熱中できるものを見つけて取り組んでみてほしいと思います。大学とは、人との出会いはもちろん、学問との出会いも提供してくれるところ。その「出会い」を大切にしてください。

た」という文にはヴォイス・マーカーがありませんが、意味は受身の内容であり、ヴォイス表現が成立しています。なぜ、マーカーがなくてもヴォイス表現が成り立っているのか。私はその要因を「語順」だと考えています。先生は現在考えていることを説明してくれた。「屈原既放」の場合は、動詞「放」の後に目的語がないため、読み手はマーカーがなくとも「(屈原が)追放される」と解釈する。中国語の場合、このように語順によってヴォイス表現を成り立たせているケースが多い。先程の使用役文も詳しく分析すると、「行かせ

る」よりも「行くように言う」という意味に近い。語順による表現が主流で、ヴォイス・マーカーはむしろ補助的と捉えてもいいのではないかと感じられるくらいです。「中国語におけるヴォイス構文」の追究によって先生が目指しているのは、人間が使う言語について総体的に考察する一般言語学の分野に、中国語の視点から問題を提起することである。「これまで一般言語学は、西洋の言語をベースに理論が組み立てられてきました。ヴォイス構文についても、有標構文(マーカーのある構文)を基本として研究が行われ

中国語と日本語の違いを切り口に「わかりやすく」

授業で先生は、中国語と日本語の違いを取り上げながら講義をするそうだ。「その方が、学生にとっても要



先生が中国語文法の研究に使用している資料

てきたのです。もし、中国語においてヴォイス構文は語順によって構成され、マーカーに頼らない「ゼロ形式」が中心であると提示できれば、ヴォイス構文に対する一般言語学の共通認識に再考を促すことができるかもしれない。私は中国語に、一般言語学の世界に新たな知見をもたらす可能性を感じているんです。従来の常識を塗り替えるくらいの気持ちで研究に取り組んでいるんですよ、と言った先生は笑った。

点をつかみやすいようです。日本人が中国語を学ぶ際のポイントとなるべく簡潔に説明するよう心がけています。約2年に及ぶ北京大学での留学や、その間に黒竜江省や吉林省、雲南省などを旅した際の体験談を話すことで、中国の文化についても触れているという。「漢字を使う点で日本語と中国語には共通点がある、という先入観を持つ学生も多いですが、伸び悩む傾向があるようです。言語学的には、日本語と中国語は別系統。中国語を純粋に「外国語」として捉え、日本語との違いを楽しみながら学ぶことが中国語の実力体得につながると感じます」

現在、ビジネスの世界で中国への注目度が高まっている。就職活動の際、中国言語文化専攻の学生が面接で「中国語がどれだけできるか」を問われることも増えているそうだ。専攻では充実したカリキュラムを用意しているので、やる気があれば相当の語学力が身に付けられる、と先生は話す。「会話力はもちろんなのですが、原文で中国語を読めるくらいの読解力も養ってほしい」と思っています。日本語訳ではなく、原文に触れることでわかる中国語の魅力や、中国文学の素晴らしさも体感してほしいですね」

言語を学べば、その国の文化もわかる

先生は、「同じアジアの言語」として中国語を学んでほしい、とも語る。「世界の価値観は、いまだに西洋が中心。しかし、アジアへの理解を深める意識のもとに中国語を学ぶことで、西洋中心の価値観を相対化して捉えることができるようになるのではないかと思います。つまり、人間の言語に多様性があるように、価値観にも多様性がある、ということですね」

そして、言語を学ぶことはその国の文化を知ること、と先生は続けた。「日本と中国は共通点も多く、似ていると感じられるかもしれませんが、中国語を学べば言語がまったく異なることがわかれると思います。言語がこれだけ違うのならば文化も民族も異なるのではないだろうか、と双方の国を見つめる上で視野が広がるはず。中国は今、さらなる飛躍の時期を迎えようとしており、中国の人々と接する機会は今後ますます増えるでしょう。表面的な類似点に惑わされず、日本と中国、そのものの姿を捉える視点は、中国の人とコミュニケーションする際にとても役立つと思います」